

水木しげる氏

表紙絵

＝悪さしちゃだめだぞ＝

表紙絵：水木しげる

- ・ 特集：私のすすめるこの一冊 2～6
- ・ 絵本の読み聞かせ講座 7
- ・ 郷土の歴史と伝承 8

私のすすめる

この一冊

毎年恒例の皆さんからお寄せいただいた「私のすすめるこの一冊」です。
今年はどんな本と出会えるでしょうか。

『歴史と戦争』

半藤 一利著 幻冬舎
推薦者：長尾 敏博

著者の80以上の著作から言葉をチョイスして1冊にまとめたもの。幕末から始まる近現代を時代順に著者の考えが散りばめてあってまさに編集の妙である。中でも著者が生まれ育ったのは、非常時が当たり前の戦争の時代。少年時代に太平洋戦争を体験し、東京大空襲では戦火の中を必死で逃げた。戦後東京裁判を見たことや元軍人達の話の聞きにいったこと等は貴重な記録だろう。そこには激動の時代を精一杯生きた語り部としての重みがある。

また著者の作家としての覚めた視線には江戸っ子の洒脱さと父親譲りの情勢を読む鋭さがあると思う。終戦の玉音放送があった時、天皇の朗読を聴いてソロバン塾の数字の読み上げを思い出し、これで大日本帝国も「ご破算」になったと悟ったという。後年の歴史作家の片鱗をみるような気がする。戦争の教訓を忘れたかのような現代の世相に対する箴言等、今耳を傾けるべき言葉も多い。是非一読を薦める。

『僕が愛したすべての君へ』

乙野 四方字著 早川書房
推薦者：大金 杏菜

あなたは、平行世界ーパラレルワールドーを信じますか？
今より少し先のお話。人間が日常的に、少しだけ違う平行世界を行き来していることが証明された世界。そこに生きる主人公・高崎暦（たかさきこよみ）。彼の子どもから、おじいちゃんになるまでが描かれている。

物語は、暦の両親が離婚をした事をきっかけに二つに分かれる。ひとつはこの本。もう一つは、同時刊行された『君が愛したひとりの僕へ』。二冊でひとつの物語。

両親の離婚後、母親と暮らしている暦。彼は、地元の進学校へ進み、ひたすら勉強に励んでいた。そこで出会ったのは瀧川和音（たきがわかずね）という女の子。彼女は、八五番目の世界で暦の恋人なのだと言うが……。

この物語は、あなたを幸せな気持ちにさせてくれると思います。

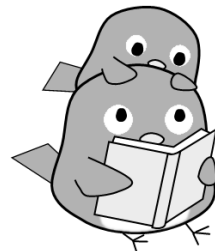
「どうか君と、君の愛する人が、世界のどこかで幸せでありますように。」（本文抜粋）

『ごぶごぶごぼごぼ』

駒形 克己さく 福音館書店
推薦者：益子 沙織 【児童書】

この本に初めて出会ったのは、息子が0歳7ヶ月の頃です。読み聞かせのため、図書館でたくさんの絵本を借りた中に『ごぶごぶごぼごぼ』がありました。この本はなんだか今まで読んだものとは反応が違う……そう感じ、その後も絵本を借りる際、時折この本をいれてみるようにしました。そんなある日、とうとう自ら手を伸ばし、所々空いたあなぼこに指を入れて喜ぶ姿に、私はとても感動しました。そして、1歳のお誕生日を機にこの本の購入を決めました。私が初めて子供に買った絵本です。その日から毎日毎日、何度も何度も読んで欲しいとせがまれ、気が付くと自分一人でも熱心に読むようになっていました。2歳になった今でもこの本は大のお気に入りです。

赤ちゃんの目を引く鮮やかな原色、美しく楽しい模様、好奇心をくすぐるいっぱいのおぼこ、そしてリズムカルで不思議な言葉たち。私が赤ちゃんの読み聞かせに是非おすすめしたい一冊です。



『忘れえぬ人たち』

—「残留婦人」との出会いから—

神田 さち子著 日本僑報社

推薦者：片山 和代

著者は、調布在住の舞台女優です。

ひとり芝居「帰ってきたおばあさん」の舞台を198回、一途に演じてきました。

平凡な主婦が、子供達に読み聞かせをしていた後に、忘れえぬ人たちとの出会いや、お力を支えに努力を重ねて、中国残留婦人の生涯を演じながら、戦争の悲惨や、平和の

大切さを情熱をもって伝え続ける姿が書かれています。中国の養母の「命に敵も味方もないよ」と言って日本人孤児を育てて下さった尊いお心は決して忘れてはならないと思います。

この本の表紙は、ちばてつやさんの、おばあさんのイラストと一昨年著者とご一緒に澄和賞を受賞なさった、山田洋次監督の心のこもった推薦文で飾られています。背景も色美しい装丁です。著者の渾身の作品を、たくさんの方々にお読み頂きたいと願っております。

『生き物の死にざま』

稲垣 栄洋著 草思社

推薦者：古家 典子

“生き物の死にざま”と同時に生きざまでもある。生きとし生けるものは皆、必死に生き、生を全うして死んでゆく。

「ならば私は？」とふと自問した。精一杯生きているだろうか？

特に心を捉えたのが働きバチの一生だ。巣の中の清掃や小守り等の内勤に始まり、最後は花の蜜を集め、巣に持ち帰る外勤。敵に襲われ

るかもしれないもっとも危険な任務。巣に戻ってもまた出ていく。死ぬまでその繰り返し。

かつての日本人サラリーマンの働きぶりが「働き蜂」と言われたことがあった。サラリーマンには定年があるが、働きバチは死ぬまでだ。過酷な運命。しかし彼女達は当然の事と受け入れ、働き、死んでゆく。

自分の人生、殊に職業人生と重ね合わせた。働きバチならば外勤にあたる年齢か。命までは取られないけれど。読み終ってもしばらく働きバチの生涯が深く心に残った。

『百花』

川村 元気著 文藝春秋

推薦者：銅谷 孝子

「あなたは誰？」つぶらな瞳で毎日問いかける68才の母に「息子の泉です」と優しく答える生活が続いている家族のお話です。

自宅でのピアノ教室、ホテルのラウンジで静かに弾く名曲、ピアニストとしてのコンサートの時の壇上での美しかった母。

生活のすべての中心にピアノがあった母は単身で泉を育て、泉に父親については生涯何も語りませんでしたが、物語は沢山ありました。

母は常に知的で美しく何事も手早く処理し特に料理は早くておいしくて見事でした。その母がアルツハイマー認知症になり年が若かったせいか病状は全く早く進みました。

泉の人生の記憶の同伴者であり、現在までの歴史を深く知る人が早くしてその知識を全く失ってしまったと知った時の泉の悲しみは深く、その上母の生活の対応も多難なものになりました。老人施設のロビーで常に「トロイメライ」を弾けている母は不思議でした。

この作品は私を含めて日本の家族の将来の姿の一部かもしれないという強い思いからお薦めしました。

『聖の青春』

大崎 善生著 講談社

推薦者：原田 純子

本書の主人公村山聖（さとし）といえば、将棋界で東に羽生善治、西に村山聖という怪童がいたと言われた人である。

村山聖はネフローゼという病を持ちながら将棋を勝ち抜いた。将棋を指してゆく中で、“ひらめきをあやつるような将棋”や“村山には見えない海がある”“神が指した手”などと言われ、くりひろげられる世界は勝ち負けだけではなく、深く広い精神世界を感じさせる。29歳で早世し常に死の近くにいた村山聖には神が住む領域がみえていたのではないだろうか？

将棋年鑑のアンケートで「神様がひとつだけ願いをかなえてくれるとしたら？」という質問に「神様除去」と応えた村山聖。神にさえ戦いを挑むように懸命に生きた証が本書の中にある。

『クオッカ ―世界―幸せな動物―』

山と溪谷社編 山と溪谷社

推薦者：佐々木 功

クオッカが住んでいるのはオーストラリア南西部の沖の小さな島です。昔はオーストラリア本土の南西部に生息していました。今は土地の開発とヨーロッパから持ち込まれた動物に食べられてしまい、今は絶滅危惧種に指定されています。悲しい歴史があったのです。

クオッカの体長は50センチほど。カンガルー科で、ドブネズミくらいですが、別名クオッカワラビーというように短い前足を地面から離して後足で立っている姿はカンガルーです。ただクオッカは鼻先短く、耳も短くてとても愛嬌のある丸顔なのです。一ページ、一ページ捲る度、とても幸せな気分で見つてしまいます。地元では観光客が自由にツーショット自撮りをしていて、クオッカ自らカメラに寄ってきてポーズをとってくれるそうです。おなかの袋で子育てをして、草食でイチジクの葉が大好物とのこと。口角が上がっていていつも笑っているように見えるので、世界―幸せな動物と呼ぶのだそうです。

『子どもが育つ条件

―家族心理学から考える―』

柏木 恵子著 岩波書店

推薦者：斉藤 和子

夏休み、通院に行く私と出会うのは塾通いの小学生達です。新学期の始まる九月、4時頃も塾に通う小学生達。夏休みは何のためにあるのでしょうか。家の娘が「はだしのゲン」の映画を見て、「こんな悲しい日に学校のプールがあるの」と問いかけてきました。

「子どもは自ら育つ」のに「先回り育児」をしていませんかと著者は問いかけています。

少子化で「いい学校」へと熱心な親達の「良育」が、ある子にとって不登校になったり、社会性、積極性をうばっています。塾での「てきぱきコース」「ゆっくりコース」の競争でなく、子どもが誰かの役に立つこと、自分で工夫して「できた」達成感が自分への自信につながります。

「先回り育児」に流れていかないためにも、親も育つ、子も育つ、生涯の学びを強調しています。親が未来の社会、環境問題と視野を広げ、学ぶことが共に幸せな社会につながるように、親の学びを強調しています。

『アウシュヴィッツの図書係』

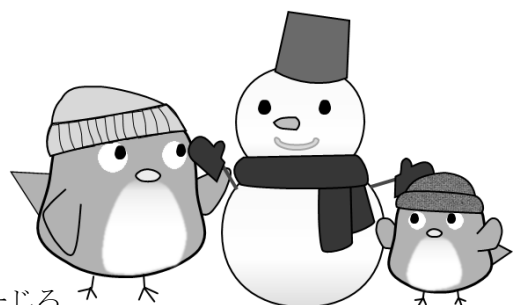
アントニオ・G・イトゥルベ著 小原 京子訳 集英社

推薦者：荒木 明子

ユダヤ人収容所についての読み物は本当に、心がどんよりとしてしまう。しかしこの本は今までの読み物とは少し違う少女の実話です。明日はもうこの世にいないかもしれない収容所の子供達の学校の様子、収容者達の日々の会話のリアルさ。絶

望と言う以外ないなかで、たった8冊の本の管理をまかされた少女の使命感、つかの間の空想。読んでいて時に普通の少女の昔話を読んでいるような穏やかな時の流れを感じてしまった。

しかし後半からは一気に読み終わり、筆者の後書きまで休むことはできません。これは実話。真実。今より本当に少し前の出来事。声高に反戦や平和を説く話しではありませんが、これは本当の反戦作品だと思います。アウシュヴィッツ、カンボジア内戦、広島長崎の原爆についての体験者が少なくなっているこの時代、もっと彼らの話を聞かねばならない。そして恐怖の中で本を読む世界に絶対してはならない。そんな思いを改めて教えてくれる一冊です。



『論文捏造』

村松 秀著 中央公論新社

推薦者：黒猫（大西あおい）

子供の頃からミステリー好きで、今も海外ミステリーを中心に読んでいますからお薦めの一冊です。

でもフィクションは読まないという方、大丈夫、実際にあった「論文捏造」の話です。論文なんて難しそうと思っている方、大丈夫、NHKの番組を元にととてもわかりやすく書いてあります。STAP細胞事件だと思った方、違います、遡ること17年前アメリカのベル研究所で起こった事件です。

なんだ、ミステリーじゃないんだと思った方、確かに殺人は起こらないし、誰も逮捕されません。でも下手な推理小説よりもずっと「謎解き」です。なぜ捏造がわからなかったのか。誰が捏造と気づいたのか。どう「犯罪」を証明していくのか。ミステリー好きな方にこそ楽しんでもらえると思います。

そして、ごめんなさい、恋愛要素は皆無です。ドキメキたい方は他をあたってください。お願いします。

『トンネルの向こうに』

マイケル・モーパーゴ作 杉田 七重訳 小学館

推薦者：K.S.

【児童書】

第二次世界大戦が始まる少し前、ドイツの空襲によって家を失ったバーニーは、そ開するために、ロンドン行きの汽車に母親と共に乗った。バーニーはそこで空襲の時に会った民間防衛隊の男の人と偶然また出会った。その男の人はバーニーに、

自分のかつての戦友であったビリーという男についての話をしてくれた。自分とビリーのきずなのことや、ビリーが知った戦争の悲しさ、残こくさや、その戦争を早く終わらせてやるとちかったビリーが負傷した味方の兵を助け、戦争で功績を上げて英雄と呼ばれるようになったことや、ビリーが降伏させ、生かしたドイツの敵兵の中に、あの第二次世界大戦を引き起こし、たくさんの罪の無い人々を殺したナチスの最悪の支配者もいたということも。本当にあった実話を元にした小説です。ぜひ読んでみて下さい。

『片手いっぱいの星』

ラフィク・シャミ作 若林 ひとみ訳 岩波書店

推薦者：井上 暁子

【児童書】

1960年代ダマスカスを舞台とした、自伝的小説である。10代の少年による日記という形で物語は進む。政情が不安定な中で、時にはおとなの世界に辛辣で鋭い疑問を發し、時には傷つきながらも、たくましく生きていく少年たちの姿をユーモラスに描いている。近所に住む友だちのサリームじいさんとの関りが興味深い。じいさんはたくさんの話を主人公のぼくに語ってくれ、いつもぼくの良き理解者である。また、新聞記者というものは真実を追求し、えんぴつと紙だけで勇気ある行動を起こす人間だと教えてくれたため、ぼくはのちに新聞記者をめざすようになるのである。めまぐるしく変わる政情、身近な人たちがいわれのない容疑でスパイ扱いされ、連行される。不安な日々の中でも自由に思考し、誠実に行動していく主人公たちの姿には学ぶべきところが多い。著者シャミはシリアから亡命し、ドイツで作家として活躍している。最新翻訳作品『言葉の色彩と魔法』（西村書店）とあわせておすすめしたい。

ユーモラスに描いている。近所に住む友だちのサリームじいさんとの関りが興味深い。じいさんはたくさんの話を主人公のぼくに語ってくれ、いつもぼくの良き理解者である。また、新聞記者というものは真実を追求し、えんぴつと紙だけで勇気ある行動を起こす人間だと教えてくれたため、ぼくはのちに新聞記者をめざすようになるのである。めまぐるしく変わる政情、身近な人たちがいわれのない容疑でスパイ扱いされ、連行される。不安な日々の中でも自由に思考し、誠実に行動していく主人公たちの姿には学ぶべきところが多い。著者シャミはシリアから亡命し、ドイツで作家として活躍している。最新翻訳作品『言葉の色彩と魔法』（西村書店）とあわせておすすめしたい。

『ぼくがスカートをはく日』

エイミ・ポロンスキー著 西田 佳子訳

学研プラス

推薦者：石井 祐成

【児童書】

タイトルからして「LGBT」関係の物語だと思った。この物語の主人公グレイソンは「トランスジェンダー女性（もしくはMTF：Male to Female）だと思われます」と、解説の松中権さんは言っている。（解説 ぼくが彼と手をつなぐ日 より）

この物語には、主人公グレイソンの苦悩や葛藤が顕著に書き綴られている。そして、今までグレイソ

ンは自分のことを「ぼく」と言っていたが、一番最後の一文で自分のことを「わたし」と言っている。その部分でグレイソンの「女の子として生きる」強い決意を感じた。

そして、身の回りにもLGBTに関する悩みをもっている人がいるかもしれないということを思い、暮らしていくことが大切だと思った。



『あいことばは名探偵』

杉山 亮作 偕成社

推薦者：上江 結弥【児童書】

この本は、ただの探偵物語ではありません。主人公のミルキー杉山は探偵でありながら、あかるく、だまされやすく、結局は妻のたつ子や自分の子供たちなどの助けを借りて事件を解決します。1人ではなく、家族などの協力によって事件が解決されていくのがこの本の魅力だと思います。

さて、この本に出てくる事件は2つあります。ひとつは、あるドラマの主演である紅井ばらひこからの依頼。これは、紅井ばらひこが間違えてサインした、ニセの契約書を持っているプロデューサーをみつけてほしいというもの。そしてもうひとつは、体重の分だけお金をくれるぶたぶた神社の秘密をつきとめたいという、金賀有三からの依頼です。

この本は事件と解答へんに分かれています。解答を見る前に自分で考えることもできるのでスリル満点です。みなさんもぜひこの『あいことばは名探偵』を読んでみてください。

『ルドルフとイッパイアッテナ』

斉藤 洋作 講談社

推薦者：上江 智希 【児童書】

このお話は、主人公の猫ルドルフが少し変わった理由で岐阜から東京に来てしまい、そこで色々なものや人と出会いながら成長していく物語です。

ぼくがこのお話を通して面白かったのは、ルドルフが初めて出会うものや動物に対しての反応でした。例として上げるならば、ステトラに初めて会った時ステトラが、

「おれの名前はいっぱいあってな…」と言った時、ステトラの名前を「イッパイアッテナ」と思いこんだり、初めて会ったおばあさんを魔女だとかん違いしたところなどです。

ぼくがすごいと思ったのは、お話の中ではあるけれど一年ちょっとで色々なひらがな、カタカナ、漢字を覚えてしまうところです。

ぼくがこのお話の中で最も感じたのは「仲間との絆」です。イッパイアッテナやブッチーとの絆があったからこそ、最後のデビルとの決闘で勝てたんだとぼくは思います。

『へびのクリクター』

トミー・ウンゲラー作 中野 完二訳 文化出版局

推薦者：上江 明穂 【児童書】

はちゅうるいをそだてているむすこがいるボドさんのたんじょうびに、へびのクリクターがとどけられました。

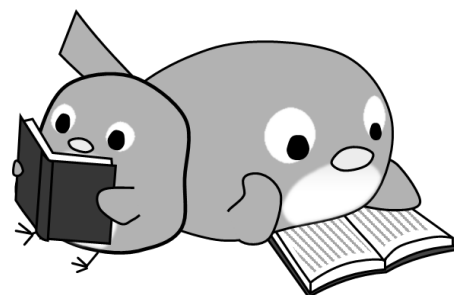
ゆうびんやさんがはこをとどけてボドさんがひめいをあげるところがおもしろいです。

おもしろいからよんでみてね。

たくさんのご応募ありがとうございました。

お寄せいただいた原稿は、掲載の都合により一部編集させていただきました。

掲載は順不同になっております。ご了承ください。



令和元年度 絵本の読み聞かせ講座

を行いました



調布市立図書館では、年に1回、子どもへの読み聞かせに関心のある方を対象に連続講座を開催しています。令和元年度は、10月3・10・17日（木）に行いました。

学校やご家庭で読み聞かせをされている方、これから読み聞かせに関わりたいという方などが、熱心に受講されていました。

1日目と2日目は、絵本の選び方や読み聞かせの仕方、プログラムの組み立て方などをお話しました。2日目最後と3日目は、参加者の読み聞かせの実践と、講師による講評を行いました。



▲講義の様子

絵本の紹介を交えながら、読み聞かせのコツをお話しました。



▲講義の様子

手遊びやわらべ歌もご紹介しました。皆さん楽しそうに実践しています。



▲講評・質疑応答

参加者の実践を受けて、本の持ち方や、声の出し方などをアドバイスしました。

●参加者の声(事後アンケートから抜粋)

- ・読み方、見せ方を子ども目線で詳しく教えてくださり今後に役立てられることばかりでした。
- ・片手で本を持って読むことがこんなにも難しく、本がこんなにも重いことを知りました。
- ・子どもの気持ちになってたくさんの方の読み聞かせを聞くことはなかなかできない経験なので、幸せな時間でした。
- ・絵本の世界は奥深いなと思いました。

来年度も開催予定です。読み聞かせや絵本に興味のある方はぜひご参加ください！

民具（臼と杵）が語る麻布づくり

関 口 宣 明

1. 麻布づくり

庶民の衣料は、江戸時代に木綿や絹があらわれるまで、長い間、麻、フジ、コウゾなどの繊維の丈夫な植物が使われてきました。これらの繊維で織った布のことを各地で、「ヌノ」とか「ノノ」とよんでいました。

なかでも麻は軽くてとても丈夫なことから、古くから栽培されてきました。しかし、麻の外皮はかたいので、衣服にするまでには、サクラやブナなどを燃した灰の上澄み（灰汁）で煮たり、内皮を細く裂いて、一本一本、糸に紡ぐなど、とても手間がかかりました。さらに麻糸で織った布はゴワゴワしているので、ウサギの餅つきにでてくるような手杵でついたり、砧きぬたといって、木槌で布をたたいたりすることで、生地を柔らかくして着ました。

織物は、タテ糸にヨコ糸を打ち込んで作られます。麻はさらすと糸が柔らかくなってしまう、ある程度強さのいるタテ糸として使えなくなるので、布に織ってから手杵でつきました。

2. 「布さらし」にも使われた臼と杵

織りあがった麻布は、まだ繊維にシミの原因となるような不純物がついているので、手杵でつきながら、川の水や天日てんびにさらすことをくり返して、布を白くしなやかにする作業も必要でした。この作業を「布さらし」といいます。『江戸名所図会』という江戸後期の本には、多摩川のほとりで女性が手杵を持って臼に入れた布をつき、そのそばで川に布をさらし、岸辺で天日干ししている様子が描かれています。これらの作業はもっぱら女性の手によるものでしたので、布を



手杵

つくのにも、重さが2kg前後の手杵と、直径43cmほどの小ぶりの臼が使われました。

3. 麻から木綿へ

麻などで織った布は、風通しがよく、汗をかく夏場は着心地がよかったのですが、冬には寒さをふせぐために何枚も重ね着をしなければなりません。言い伝えでは、「今年は着物6枚分の寒さだ」とか、「7枚分の寒さだ」といわれていました。

交通の不便な山地にくらべ、物資の流通がよい平野部では、布づくりに手間のかかる麻にかわって、保温性にとんだ木綿の普及が早く、調布でも1762年（江戸時代中頃）には、織物に仕立てたという記録があります。そこで麻布づくりはかなり前に行われなくなっていたことがうかがえます。

しかし、現在の染地1、2丁目に「ぬの多」という地名があるように、多摩川の布さらしの言い伝えが色濃かった土地柄でしたので、幕府によって編まれた『新編武蔵風土記稿』などさまざまな書物や絵画で紹介されて、広く知られるようになりました。

ふだん記録にあらわれにくい庶民生活の移り変わりは、郷土にわずかに伝えられた民具や地名からもうかがい知ることができます。

※参考文献：吉田真一郎『近世日本麻布考』

『調布市史中巻』

刊 行 物 番 号

2019-160

図書館だより 第254号

令和元年12月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>